





初体験

【1】初体験

私の初体験は高校一年生。

当時付き合ってる人はいなかったけど、仲がいい男友達が居た。

「ホテルって行った事ある？」

そんな簡単な会話をされた。もちろん行った事なんてある訳が無いと答えた。

「俺もないから、一回行ってみようよ！いざ行った時に恥かきたくないじゃん」

っと言われ、そういうもんなのかなあっと思い安易に「いいよ」と答えた。

私はどうやら騙されやすいらしく、よく友達に「ユイは警戒心がない！」とか

「もっとちゃんとしなきゃダメだよ！」っとなぐられる。

私自身そんなつもりはないんだけどなあ。

いつも何かが終わったあとに「ああ、私騙されてたのかな？」って思うくらい。

興味からか、押しに負けたのか。休日に実際に行く事になった。

初めて入るラブホテルはホテルみたいにきれいでお風呂も大きく、全然想像よりいやらしくないなって言う感想。

もっとピンクの照明や、回転するベットがあると本気で思ったた。

「せっかくだからお風呂入ってくるよ～」

彼がそう話すのも分かる気がする。

こんなに大きなお風呂を見たら、テンションが上がりそうだな。

「ユイも入ったら？泡風呂とか出来るみたいだし、楽しそうだよ」

えっ？そうなの？泡風呂なんて、テレビの世界かと思ってた。

私はやり方を聞いてお風呂を一度空にして泡風呂にしてみた。

確かにこんなに広いお風呂はいいなあって思いながら数十分ぼーっとする。

普段は絶対に出来ない泡風呂に、まるで有名な女優にでもなったかのような気分。

お風呂からあがると、待ちかねていたかのように彼が私に話しかける。

「せっかくバスローブあるのに着ないんだ」

「恥ずかしくて着れないよ。はだけたりしたら大変じゃん」

クスクス笑う彼を前に、正当な答えを口ずさんだ。
男の子はいいよね。特にはだけでも問題は無いんだから。
女の子は少しの露出すら気になっちゃうもん。

「ねえ、ユイ。こんな番組もあるみたいだよ」

って言ってHなテレビに急に切り替える。
凄い綺麗な女の人が男性二人とHな事をしているシーンであまりにも過激。
それまで見た事の無い激しいSEX.....
私が即座に「やめてよー」と言った。

「こんなところでしかこんなにしっかり見れないじゃん！ユイも勉強しといた方がいいんじゃない？」

「本当に恥ずかしいからやめよ？」って言うと彼が

「ユイ経験あるの？」

って聞いてきた。

「こんなのも見たの初めてだよ」と返した。

「俺もなんだよね。結構クラスのやつなんか経験あるやつがチラホラ始めてさ。焦るよね」

——確かに同級生は初体験を終えた人も出てきてる。
でも聞くのは「痛かった」とか「いちゃいちゃしてる時の方がいい」とか。
ただ、私は別に焦ってない。

「初めて同士だし、一緒に勉強しない？俺ユイの事嫌いじゃないし、第一可愛いじゃん！」

って言って近づいてくる。

私は絶対に無理だよって答えた。

第一怖いし、心の準備だって出来ていない。

それに好きな人とした方がいいに決まってる。そんな事、経験が無い私にだって分かるよ。

「ねえ...初めては絶対好きな人同士の方がいいよ」

「そうだよね.....じゃあキスだけしよっ」

そう言って彼は急に私の方を強く掴んで無理矢理キスをしてきた。

急な事でびっくりして私は頭の中が真っ白になった。

「今何が起きてるの？」まさにそんな感覚。

抵抗を止めた時から始まる長いキス。確かにキスって気持ちいいかも。

1分くらいかな？2分くらいかな？覚えてないけど、長いキスが終わったあと私は彼に「絶対内緒にしてよ」と恐らく赤い顔で彼に伝えた。

「うん分かってるよ！俺も練習のためにユイとキスしたって言えないし。ただもう一回させて」

そう言ってまたキスを。今度は少し激しい。

どうしてだろう。好きでも無いはずの彼のキスが私には高揚させる魅惑的な薬のようだった。

でも、次の瞬間に彼が胸を触ってきた。

「それは無理だよ？」と彼の右手をそっと押さえる。

それでも彼はキスしながら胸を触ってくるので、上手く話せない。

「大丈夫、少しくらいなら。少しだけお互い経験しようよ？」

そう言って服をほとんど脱がされてしまい、裸で抱き合う形になってしまう。

「無理矢理な事はしないから、だから少しだけ体を触らせて？」

私の答えを聞く前にどんどん先にすすんで行く。

よくわからないまま、裸で抱き合っ、キスをされ、体を触られて...。しかもなんだか気持ち良い。

一緒に抱き合ってるのも確かに気持ち良い。

胸も敏感な所を触られる以外は凄い気持ちいいし、マッサージされてるみたい。

「・・・ハァ・・・アンっ！」って思わず変な声が漏れてしまう。

生きてきて出した事の無い甲高い声。

それがまた凄い恥かしい。

胸を触っているだけならまだ良かった。でも思春期の男の子がそれだけで済むはずなんて無かった。

彼は当たり前のように、手を私の下半身へと伸ばして来る。

「キャッ！」っと言った私をよそに彼が

「ユイ可愛い！！少しだけ触らせて・・・」

っと言って下の方を思いっきり触って来る。何だかわからないうちに触られて、彼が妖艶な言葉を発する。

「ここって本当に濡れるんだね、なんか凄いエロイ・・・。ユイも気持ち良くなってきてるって事だね」

そう言って中に指が入って来る。思わず「痛い！！」そう言うと彼もびっくりしたのか、思わず指を抜いてくれた。でも二人の冒険は終わらなく、彼が私の上にかぶさる形になる。

「ごめんね、俺も初めてだからどうしていいのかわからなくて。痛かったんだね、でも.....ちょっとだけ我慢して」

そういうと、もの凄い痛みが私の下半身にビリビリっと来ました。何が起こったかわからず・・・

ただただ「痛い！やだ、痛い！！」そう叫んでいました。

「もう少し！もう少しだけさせて！すごい気持ちいいからユイの中！！」

そんな声が軽く聞こえたけど、もう痛くて何がなんだかわからない・・・

そのあとすぐに彼の動きが止まって私に

「ユイすごく気持ちよかった・・・」

そう言ってまたキスしてきました。

私は何がなんだかわからず、ただジンジンする下半身が気になってボー然としていた。

私ってHしたのかな？何が起きたのかな...ただ、すごい痛い。

「ユイ！二人で大人の階段登っちゃったね！俺ユイと出来てマジ幸せだわあ、ユイもそう思ってくれたらうれしいな！でもみんなには内緒にしような、なんかこんな理由でしたのとか恥ずかしいし」

ああ、そうなんだ……内緒にしなきゃいけないんだ。

そうだよな、だって別に付き合ってる訳じゃない二人がこういう事したってみんなにばれたら、気まずいもんね。

うん。内緒にしよう。それがきっとお互いのためなんだもんね。

彼がそう言ったので私はきっとそういう物だと思ったし、誰にも言わない事が最善なんだろうなと思った。「このことは誰にも言わない方が良い」自分で自分に言い聞かせた。

私の初体験は何が起きたのかわからずに終わった。

幸福感も無く、絶望感も無くただ気がついたら全ては終わっていた。

【2】

次の日にいつもと変わらずに学校へと向かった。

私も初めての相手、直哉も同じクラスなので当たり前のように顔を合わせる。

でも私達は何も変わらない会話をしなければいけない。

いつもと同じように会話をして、いつもと同じ笑顔を見せ合うの。

それが私がしなければいけない演技。

「ユイおはよう！あれ？なんだかキレイになった？」

昨日の今日でそんなにキレイに磨きがかかるとは思えない。

そう、彼なりの小さな皮肉だったんだね。「Hをしたら女性はキレイになる」と言う皮肉を。

いつもとなにも変わらない一日。処女を脱したら何か世界が違って見えるのかな？とっていたりもした。

でも現実は何も変わらない。大人になった気分でも無い。

『直哉もなにも言うなって言ってたし、迷惑かけられない』

その思いが私をより一層、名女優バリの演技をさせた。

ある日女の子同士の会話でありがちな会話。

「ユイ彼氏作らないの？もったいないよ」

「え、でも私...好きな人とかいないし」

「まあ初めては好きな人と結ばれたいよね、わかるわかる！痛かったけど、幸せだったもん」

なにも言えなかった。ううん、言いたかったけど言えなかった。

「そうか、好きな人と結ばれると幸福感で満たされるんだ」

じゃあ私は駄目だなあ。何も感じれなかったし、もう初めては無くなっちゃった。
そう思ったら、なんだか凄い悲しくなって、相槌しか打てなくなった。

「隣の高校の人紹介しよっか？ちょーカッコいいよ！」

「ううん、大丈夫。ありがとね。今はいいんだ」

その日一日が本当に重かった。何故か大事な友達も裏切ってるような気がして、罪悪感だけが私に残っていった。

その日の下校の途中・・・

「ユイ！」

直哉だ。

「一緒帰ろうぜ！」

なんで急にそんな事を言い出すんだろうと思ったが、断る理由もなかったので一緒に帰る事になった。

「ユイごめん、ユイ達の会話聞こえちゃったんだ。ちょっと心配になっちゃって。」

そっか、だから今日に限って一緒に帰ろうと言ってくれたんだ。直哉優しいなあ。
あの後別に漫画のように直哉を好きになったり、気になったりはしなかった。

そんなもんなんだなあって毎日過ごしてた。好きでも嫌いでもない。

ただ、もしも天秤にかけるなら、好きがギリギリ勝つくらい。友達としては凄い面白いし好きだけど。

「言わずらいよなあ、俺も男子の中では童貞だからさっ。誰にも言ってないし、会話も絡みずらいんだよね」

なんだ、直哉やっぱり良い奴なんだなあ。てっきり仲いい友達には言ってるのかと思ってた。

「お互いつらいつて事で・・・今週の土曜日游びに行かない？」

意外な言葉だった。

だって、直哉は気を使ってきているだけで、本心はとりあえず初めてを捨てればOKだと思われてる程度の扱いの女だと思っていたから。

「私もそこまでバカじゃない。それくらい分かってるよ。だから別に迷惑かけないし」そう思っていた。

違うのかな・・・なんなんだろ。わかんない。

でも悪い気はしないな。

「いいよ、どっか行こう」

「やった！じゃあ・・・ありきたりに豊島園のプール行こうか」

「うん！晴れるといいね」

そんな会話で分かれ道でバイバイをして別れた。

正直いろんな事を想像した。

私の事好きなのかな？

照れ隠しでホテルではあんな風に言ったのかな？

告白とかされるのかな？

私も別に嫌いではないし・・・どうしよう。

その日は漫画みたいな事を凄い想像した。

でも漫画じゃなくても、普通に考えたらそういう流れだよな？
私自意識過剰じゃないよね？

あと二日・・・

正直楽しみになっちゃった。

.....うん、期待しすぎてたよね。現実ってこんなもんなのかなって思った。

まさかあんな事になるなんて・・・

【3】

土曜日が来た。待ち合わせは12時に豊島園の前のチケット売り場。プールなんだけど、頑張っ
てオシャレもして来ちゃった。

「ユイ！早いね」

10分前に着いたのだが、直哉は5分前。全然問題ないのになんか謝ってくる。でもそれが嬉し
いと思った。

プールの入場券を買って、2人でプールへ向かった。カンカン照り。正直日焼けが苦手な私
はちょっと心配だった。

「流れるプールで遊ぼうぜ！」

直哉の言う通りに入口から左の方へ向かった。大きい陸上のトラックのような形の流れるプール
。流石に晴天の土曜日は人が多いなあ。

その日はとにかく馬鹿みたいに遊んだ。直哉は馬鹿をするタイプなので、全く飽きない。ってか
楽しい！

「ユイって本当スタイルいいよねえ、なんで彼氏いないの??」

またそういう事言う.....その気になっちゃうじゃん。

それにしても暑い。ちょっと疲れてきた。直哉もそれに気づいてくれてか「休もう」と。2人で

軽食とドリンクを買って、日傘の下で休憩をした。

「・・・・・・・・」

「ちょっと！直哉君！何そんなにマジマジと見るの！」

「いや、ごめん。見とれてた。これってデート？だよ。ユイとデートしてるんだなあって思ったら不思議な感じがして」

ダメだよ・・・絶対ズルイ。本当に期待しちゃうよ？

だって・・・こんなのずるいもん。周りはカップルだらけ。きつとこの中に同じ高校の人もいるんだろうな。

でも全然わかんない。同じ学年なら分かるかもしれないけど、今の所見当たらないし。

こんな誰かに見られるような場所を選んだって事は、きつと誰かに見られてもいいって思ってるんだよね？

だって、誰かに見られたく無かったら、離れた場所かカラオケとかだよ。

ダメだ、私好きになってる。全然そんなつもりじゃなかったのに。

気になってしょうがない。ってかズルイよ。

「ユイ、なんだかいっぱい遊んで疲れたね。早めに帰ろうか？」

正直この天気と暑さで疲れていたのは事実。一緒にいたいけど、体力の限界。直哉優しいなあ、絶対まだ遊びたりないはずなのに。

2人ともシャワーを浴びて、着替えてまた落ち合う事にした。

もう分かってるよ。私直哉が好き。

初めは、あんな事がきっかけだったけど。だってそばにいてほしいもん。

2人で自転車で帰り道、何かを言われるかもと期待しながら帰っていった。

自転車で15分・・・あっけなく家に着いちゃった。あ～あ、期待しすぎだな私。

「ユイ今日楽しかった！ありがとね！」

そう言ってまた自転車で直哉は帰って行った。

【4】

次の日。

直哉からの電話

「ねえユイ！今日って何してる？」

「特に何も無いけど、どうしたの？」

正直心が踊った。

直哉の話しだと今日も暇だから、ちょっと遊ぼうとの事。全然いいよ！むしろ遊んで遊んで！

近くのマックで遅めの昼ごはんを食べながら、いつも通りお話。

「ユイさあ、昨日のプール先輩に見られてたよ。ちょー突っ込まれちゃった」

そりゃ地元だし、誰かいるだろうなあとは思ったけど、やっぱり見られてたんだね。

でも直哉も別に困った風じゃなくて、面白話しとして話してくれてる。「やっちゃったね」って。その会話が嬉しくてしかたなかった。そして急に直哉が言った。

「ねえユイ、ホテル行かない？」

「えっ？」きっとそんな顔をしてたんだと思う。

どこからその話しになったの？しかも昼間のマックで。付き合おうとか、好きとかそういう話しじゃなく、ホテルに行く話？

急な発言で、頭が真っ白になった。

「いや、ごめん。急にわけわかんないよね……。あのさ、この間部活でめっちゃ怒られて、すっごいへこんでたんだ。ちょっとでもユイに甘えれたらなあって。家に行くわけにもいかないしさ。ユイにしか頼めないんだよ」

そっか、私にしか頼めないのか。そうだよ、こんな所で甘える訳にもいかないし、きっと直哉今つらいんだよ。

「うん……。しょうがないよね、何もしないならいいよ」っただけ答えた。

「うん！ありがと！ユイに言って良かったよ！」

そう言って、ちょっと離れたホテルに行く事になった。地元じゃ怖いしね。直哉の役に立とう。直哉はいわゆるボンボンで。お父さんがITかなんかの会社をやっていて、何不自由ないって

感じ。この前のホテル代も今日のホテル代も直哉が出してくれた。

「はぁ、やっぱり個室って落ち着く、ね？」

うん。私もそう思った。

だって周りの目を気にしないでいいし。今回で二回目だから、前みたいに変な緊張はなかった。でもホテルの中に入るまでは緊張したけど。

ちょっと会話をしてたら、直哉が凄い近い場所にいた。手を握って来る。すごいドキドキする。きっと甘えたいって言ってたし、くっつきたいのかなぁ？そう思っているうちに、2人でベットに寝転んで話しをしていた。

「ゴロゴロするのって気持ちいいねー、ユイも近いし、嫌な事忘れちゃった」

そう言って腕枕をされる形で抱きしめられた。抱き枕効果なのかな？直哉は凄い幸せそうな顔してる。これくらいなら別にいいよね。だって何かHな事してる訳じゃないし、直哉の事好きだし……。

「……………」

気づいたらキスされてた。凄い甘いキス、気持ちいい。きっとダメな事してるよね？だって付き合ってる訳じゃないのに、こんな事って。

でもどうしよう。今すごい幸せなの。うん、もうキスはしちゃってるし、しょうがない。もしかしたらこのままの勢いで「好き」って言ってくれるかもしれないもんね。何も言わずにそのまま何かをしようとしたら拒否しよう。

うん、そうしよう。今はこのまま幸せな時間を過ごそう。

「ユイ……」

来るのかな？言われるのかな？顔が近くて恥ずかしいよ。

「……………」

え？ちょっと待って、なんで服を脱がされてるの？ムリだよ、ダメだよ。だって直哉の事好きだけど、今はHする理由がないもん。

「直哉……ダメだよ。だって、この前で2人とも目的の初めては終わったでしょ？」

「うん・・・そういう事じゃないんだ。Hしたいとかじゃなくて、裸でくっつきたいなって。この前裸でくっついてるのが、凄い気持ちよかったから」

うん、確かに気持ちよかった。Hしてる時より断然気持ちよかった。そういう理由ならしょうがないのかな？Hするってわけじゃないし。

結局何も言えず、直哉のされるがままに脱がされていった。電気暗くしてくれてたのが唯一の救いかなあ。

でもやっぱり恥ずかしい。そうしてお互い裸になって抱き締めあった。

「ユイの裸気持ちいいなあ・・・こうしてると落ち着く」

嬉しいけど、恥ずかしいよ。

確かにこうしてるのは凄い気持ちいい。

でもまた彼が私にキスをしてくる。さっきより体が密着している分距離が無い感じ。どうして抱き締められてるのって幸せなんだろう。

でもいいのかな？付き合ってる訳じゃない2人がこうしてると。

変だよな？でもどうしていいかわかんないよ。

でも幸せなの。

「アッ、ダメだよ」

直哉が私の胸を触って来る。くっついてキスするだけだと思ったのに、敏感な所まで触ってくる。その度に体がビクッビクッってしちゃう。

「この前、俺だけ気持ちよくなっちゃったから・・・ユイにも気持ちよくなってほしいんだよ」

そんな事を言って私の体を触ってくる。

この前強引にしたから罪悪感なのかな？悪いなって思ってくれて、きっと私の事気持ちよくさせようとしてくれてるんだ。

でもまだ怖いんだよなあ・・・あんな痛いのがイヤだし。

だから私は「大丈夫、気にしなくていいから」そう言った。

「ダメだよ。ユイにこのままHが嫌いになって欲しくないもん。俺のせいでトラウマとかいやじゃん？」

直哉の声が優しい言葉に聞こえる。甘い甘い囁きが私を襲う。

そして彼の手が色んな所を触って来る。胸、お尻、お腹・・・お腹は流石にくすぐったい。思わ

ず笑ってしまう。

「ごめんごめん」

そうって直哉が下の方に手を伸ばしてきた。

『指入れようとしてるのかな？痛いからイヤだなあ』

そう思っていたけど、表面だけ軽く触って――

「すごい濡れてる・・・ユイ、エロイ！感じてる顔もすごい可愛いし」

ダメ！恥ずかしい。

この前より少しは冷静だから、今度は恥ずかしさの方がすごい勢いで上がってる。

「直哉・・・ダメだよ。これ以上は、ね？私トラウマなんかにならないから大丈夫。裸で抱き合ってるの気持ちいいの分かってるもん。だから気にしないで。」

直哉はそれを聞くと「うん」とだけ言って私の上にかぶさってきました。そして優しくギュッと抱きしめてくれる。

ああ・・・抱き締められるの気持ちいいなあ。このままキスしてくれないかなあ。私からは出来ないし。

そんな事を考えてたら、彼は優しくキスして来てくれた。

「私物欲しそうな顔してたのかな？」そう考えたらちょっと恥ずかしい。

それから長いキス。相変わらず胸は触ってくるけど、キスが気持ちい。

その時――

「えっ？」

直哉が私の中に入れようとしていました。正確には少し入ってる。

「直哉！ダメだって！私達、アっ・・・」

入って来ちゃった。どうしよう・・・また痛いが始まっちゃう。

「ユイごめん、我慢できないよ・・・ユイとひとつになりたいんだ」

そう言って直哉は奥まで入れてきました。

「・・・・・・・・」

どうしよう・・・

なんかおかしい・・・

この前と違う・・・

全然違う！

ダメ・・・変な声出ちゃう！

「ちょっと待って直哉！本当におかしいの！この前となんか違うの！」

そう言った私の顔を見て直哉は凄い嬉しそうな顔をして、更に腰を動かしてきました。

「お願い、待って・・・アッ！ハア、アアッ！」

どうしよう・・・すごい気持ちいい！これがみんなが言ってた感じるってやつなんだね。ダメ、下が気持ち良すぎておかしくなりそう・・・声我慢してたらオカシクなる！！

「アッ、アアッ！ダメッ、直哉あ、声きかないでえ！変な声出ちゃうからあ！」

「ユイ感じてくれてるんだね、嬉しい！大丈夫、もっと感じて！」

言われなくても感じてるよ・・・。

Hってこんなに気持ちいいの？みんなが週末の度に彼氏に会いに行ったり、お泊り行ったりする気持ち分かるかも・・・。

ダメすごい気持ちいい！もう声我慢とか考えられない！何これ！

「なおやあ、どうしよう。すごい気持ちいいよお。アアッ！イッ！ダメダメ、激しくしないでえ」

「ユイ・・・いきそうなんだ、行くね！」

「ダメ！ダメ！そんなにい、アッ、アッ、アアアアアアッ！！」

凄かった、こんなに凄いものだったんだ・・・。

声も出しすぎて喉が痛い・・・

すごい溶けそうだったぁ……

「ユイ凄い声でてたね、可愛かったよ」

言われてまた恥ずかしくなってきた、だって声出ちゃうんだもん。みんなこんなになっちゃうものかな……。

それよりも！！結局しちゃった。どうしよう、なんか気まずいなぁ……。直哉どう思ってるのかなぁ。どういうつもりでHしたんだろ。

「ユイにも気持ちよさ分かってもらえて良かったよ！これで本番もお互い大丈夫だね」

うん……。最初の目的はそうだったもんね、じゃあこれでおしまいって事かなぁ。なんかそう考えたら悲しくなってきた……。
本当に直哉はそういう風に思っただけなのかな。

「ユイ！また本番前に練習したくなったら、俺いつでもいいよ！いつでもユイの力になるからさ～、なんでも言って！」

「ありがとう」っとだけ言って、私はシャワーを浴びに行った。
一人で考えたくなかったから。だってそうでしょ？

「いつでも」って何？。
やっぱり照れ隠しでもなんでもなく、ただ単に練習したかっただけ？Hがしたかっただけ？頭の中がグルグル回る。

シャワーを浴びて一言だけ言った。

「私、処女じゃなくなったから、初めての人とする時ばれちゃうよね」

本当に最後の抵抗だった。

これで何もいわれなかったらしょうがない。素直に私は引き下がろう。どうせ元々仲のいい友達ってだけだもんね！また元に戻ればいいだけの事だもん。

私は言葉を待った。そして……

「そっかぁ、相手とする時に印象変わっちゃうもんね。処女の方が、なんか私固いよって言うか、好印象かも」

え……。この人何言ってるの？本気で言ってるのかな？でも本当っぽい……。そんな事を考えているうちにまさかな言葉を聞きちゃった。

「男の場合はねー、ちょっと経験ある方が相手の女の子満足させられるからいいけど、女の男性経験数なんて、増えれば増えるほどマイナスかもね」

私は泣いた。ううん、気付いたら泣いていた。

じゃあ私はなんだったんだろう。私は直哉の事好きになってたよ。でも直哉は違ったんだ。

「ユイどうしたの？なんで泣いてるの？」

「直哉にとって私って何？」

言っちゃった。言わないって決めてたけど、勝手に口から出ちゃった。だって、わかんないんだもん。直哉の気持ちも、男性って生き物自体の心も。

「ごめん...嫌な思いさせちゃったんだよね。俺にとってユイは大切な存在だよ！大切な友達だし、ユイは凄い友達思いだし。すごい好き」

「え・・・？」 そうなの？直哉私の事好きなの？一気に顔がゆるんじやった。続けてこう言ってくれた

「ユイと一緒にいると、凄い楽しいし、ずっとそばにいたいんだ！だからずっとそばにいて欲しいなあ、何があっても！」

その後だったの。私の心が頂点から地獄にたたき落とされる言葉を聞いたのは。直哉が口にしたのは最悪の言葉。

「ユイとはずっとそばにいたいな」

この後・・・

「ユイに彼氏が出来てもね」それでもそばにいてね。」

「・・・！」

どういう事？彼氏が出来ても？何言ってるの？

「え、どういう意味??」そう素直に聞いた。

「え、いや、そのままの意味だよ。ユイに彼氏が出来ても、今みたいに、時間の合う時は会って、たまにお互いの気持ちがあるときはHして、みたいなの」

だめ、よくわかんないよ。じゃあこれは何なの？「今の2人はどういう関係なの？」そう聞いた。聞かないつもりだった。でも聞いたの。

「今までと一緒にしょー！学校といつ時となんら変わらない関係だよ。でも違うと言ったら、こーやってHな事しちゃってる事かな？」

「俺、隣の高校に彼女いるしね」

「え・・・？」続けて直哉が言った

「まだキスしかしてないけど、やっぱり付き合ってる子に恥かきたくないじゃん？俺はこれでいざって時に自信がついたし。ユイも経験出来てよかったでしょ？お互い良い事づくしじゃん」

私は一瞬で奈落の底に落とされた。

そっか、私完全に都合のいい女だったんだ。

頼めばやらせてくれる、楽な女って思われてたんだ。

私馬鹿みたい。優しさに酔いしれて、本気で好きになって、初めても捧げちゃって。

「うん、そうだね。ありがとう」そう答えた。

「でしょー！流石ユイ！話が分かるなー」

分かる訳ない。ただ自分に情けないって思って、これ以上何も言えなかつただけ。

私は家のベッドで泣いた。とにかく泣いた。お母さんが心配して部屋に入ろうとしたけど

「失恋しただけだから、ごめんね心配かけて」そう言うと

「そんな年頃だものね、あまり気にしちゃダメよ」そう言ってすぐに引き下がってくれた。

そうだよ、そんな年頃だもんね。そういう時は一人で居たいって察してくれたのかな？でもごめんねお母さん。全部は言えないよ・・・

その日はご飯も食べれなかった。

何も受け付けない。

自分が悲しかった。

好きになったんじゃない、好きにさせられたんだ。

心も体も。

私の初めてはこうして終わった。
本気の恋心も、初体験の相手もすべて。

学校へ行くと普段通りの直哉、何も変わらない。

そりゃそうだよね。

たまに言われる「今週行かない？」って言葉。それくらいかな、今までと変わった事は。
お願い、本当に好きになった人だから、これ以上幻滅させないで。

さよなら、初めての人。

高校一年の冬

【2】高校一年の冬

「最近直哉と話してないね、なんかあった？」

11月の終わりに急に言われた。仲のいい加奈に。う～ん、っていうよりは親友だね。加奈は。

「え？そうかなあ・・・普通だと思うけど」そう答えた。

「ユイ、私に隠しごとするの？」

加奈は鋭いなあ

「ほんと何もないよ。加奈心配性！」

そんな会話で無理矢理終わらせた。あれから三カ月、そりゃギクシャクもするよね。でも私の中では本当にもうなんでもないことなんだけどなあ・・・

学校の帰り道、加奈と二人

「ユイ！本当の事言って！心配なの。嫌だよ、何にも言ってもらえないの・・・。ただ付き合っているとかを隠してるならいい。それだったら私のおせっかいだなんて思える。でも違う気がするの！こんなの・・・寂しすぎるよ」

加奈……。なんでだろう？勝手に涙が出てきた。一度出たら止まらなくなった。私はその場でしゃがみ込んで、泣きじゃくった。加奈の抱きついて泣きじゃくった。

そっか、私は話したかったんだ。聞いて欲しかったんだ。ずっと我慢してたんだ。

私は全部話した。途中何を話してるかわからないくらい、きっと叫ぶような感じで話してた。全部、本当に全部。何をどういう順番で話したかなんて覚えてない。ただただ、すべてを加奈に叫んだ。

「ユイ・・・うん、つらかったね。ごめんね、私もっと早く気付いてあげられれば良かった。私ずっとそばにいたのに」

加奈に迎え入れられるように、抱きしめられる。

加奈の胸の中が物凄く落ち着いた。きっと涙でいっぱい濡れてるんだろうなあ、加奈の制服。でも・・・それでも今はこのままがいい。

少しの時間がたった時、加奈が私の肩を押して少し大きな声で叫んだ。

「バカ！ユイはバカだよ！」

「うん・・・ごめんなさい。私がちゃんとしてないから・・・」

「そうじゃない！なんで言わないの？私はユイの何？ずっと一緒だったでしょ？少なくとも悲しさは半分に分けられた。話すだけで絶対少しは心とらいだはずだもん！それをこんなになるまで一人で抱えるユイはバカだよ！」

——ああ、そうなんだ。

私話しても良かったんだ。加奈には全部さらけ出してもよかったんだ。

「うわあああん！かなあ！！」

またいろんなものが押し寄せてきた
自分の過去の事を超えて

加奈と言う存在がそばにいること・・・
それが何より私を覆って

ごめんなさい、ごめんなさい加奈。私、誰にも迷惑かけたくなかった。
私の過ちだし、怒られるのも怖かった。嫌われたくなかった。
なのに、私はきっと黙ってる事で親友を悲しませてしまった。

加奈・・・そんな目で泣かないで・・・ごめんなさい。
黙っててごめんなさい。

「直哉・・・絶対許せない！」

加奈は強い眼差しで話した。

「加奈・・・私加奈に話せただけでいいの。だから直哉の事はもういいの。聞いてないことにして？」そう答えた。

だって、逆恨みとかも怖いし。いろいろ同級生に言われるのも怖い・・・

「そっか、そうだよ、ユイの事考えたら確かに直接何も言えないよね。でも・・・！」

そう言って、加奈は何かを考えてるみたいだった。私・・・加奈に話せただけで十分だよ？これ以上何かを求めたらバチが当たっちゃう。

今は加奈の存在だけで私は十分なんだよ。

【2】

「直哉あ！最近男性ホルモン出まくってんじゃない？目がキラキラしてるよ〜」

加奈の声。私は少し焦って彼女の元へ向かおうとしたけど「大丈夫」ってアイコンタクトが軽く来る。

「おっ！俺の魅力に気付いたかあ。ってか、きっと彼女のおかげだな！最近ラブラブだからな！」

うん、そうだよ。胸が少し痛くなった。もう気にしてないはずなのに。引きずってるんだな、私。

「直哉、彼女いたんだー、初耳ー。ねえねえ、ユカ、真奈美！直哉彼女いるらしいよー」

「まあ直哉顔はイケメンだからねー、顔は」

「そうそう、顔はね、顔は」

「おいおい！結構ひどくね？」

加奈は何をしようとしてるんだろう？こういうときの加奈は少し怖い。私の事を思ってなんだろうけど。

「な〜んだ、じゃあ直哉誘うのやめよっと」

「え？なにになに??」

「べつに一、彼女持ちは興味ないも〜ん。ちょっとHなお願いがあったんだけど、彼女に悪いからね」

「え・・・なおさら聞きたいんだけどなあ」

私にはまったくついていけない言葉の攻防戦。

加奈頭いいからなあ。きつこう言ったら相手はこう言うって言葉がわかって言ってるんだろ
うな。

「じゃあ・・・週末時間取って？」

「お、おう！」

チラッと私の方を見る直哉。

私に罪悪感なのかな？だとしたらお門違い。

むしろ早く忘れたいんだから。

「じゃあ土曜日の15時にね！ドタキャンはイ・ヤ・よ？」そう言って彼女は胸の谷間を見せてる
。

「分かった！了解！電話するよ！」

加奈は女の私が言うのもなんだが、凄い美人なグラマー。ほんとに同い年？って思うくらい大人の
雰囲気。

私は学校の帰り道に小さな質問をした。

「・・・ねえ加奈？」

「大丈夫、言いたい事は分かってるよ。ユイは心配しないで！別にユイに迷惑かけないし、私個人
の問題。任せて。私が小悪魔って知ってるでしょ？」

もう・・・それが心配なんだって。

前の彼氏も、浮気が許せなくて相手の学校に友達作って、結局その人学校にいられなくなるまで
してたじゃん。

「別に変なことはしないよ？ユイのエッチィ！」

「もう！そんな心配じゃない！」

「アハハ、分かってるって！別に追い込むわけじゃないし、何かする訳じゃないから。ただね、どうしても許せないの。ユイをこんなになるまで追い込んだ直哉を」

加奈・・・

「あ、結局怒りに任せて追い込むかも～」

「ちょ、ちょっと！加奈あ！」

「アハ、冗談だよ」

土曜日は明後日。私は家から絶対出ないってことで、待たされることになった。

約束がされた土曜日には。加奈は直哉と会う前に私の家に来る。

「どう？先週買ったんだ～」

「凄い可愛い！って言うか、加奈ちょっと胸元きわどくない？恥ずかしくないの？」

「女の武器は出さなきゃ～。ユイだって...」

胸元を見る加奈。

「ちょ、ちょっと！」と言って隠れる。

と言うか、その格好で直哉に会うんだよね？大丈夫なのかな。なんか心配だなあ・・・。

「大丈夫。別にHな事する訳じゃないし！そろそろ待ち合わせの時間かなあ、ちょっと早めに行きますか」

そう言って加奈は準備をして家から出て行った。

そう、目的の場所へ。

【3】

「おっ！直哉もう来てるなんて偉いじゃ〜ん。関心関心」

「そりゃ、加奈様の誘いだからね〜。っで、どこ行くの？」

「とりあえず〜、直哉の家って何気にお金持ちだよな？」

「え、まあ。親の金だけど、普通の人よりはそうだと思うけど……。あ、何か買わせるつもりだな！」

「ブブー！私別にブランドとか興味ないし、欲しいのは自分で買いたい主義なんです！」
続いて加奈の言葉は続く。

「ってか直哉さっきから胸見すぎ！まあ、思春期だもんねえ。っで事でも話もあるから、とりあえずホテル行かない？もちろん直哉の支払いで」

いきなりの提案で困惑の顔を見せる直哉。

状況がうまく飲み込めず、でもまあ「お、おう！」っと受け答えをする。まあ多少なりとも期待はしていたんだろうな。あっさりホテルへと向かった。

「ホテル来るの久々だなあ、彼氏とも別れちゃったしね！」

「ああ、聞いたよ。俺の彼女って隣の高校だから。っでかそうとう追い込んだらしいじゃん」

「追い込んだって失礼！あいつが悪いから、せめてあいつの高校の女の評判を落とそうとしただけよ。他の女の子が不幸にならないように」

そう、加奈は怖い女みたいな扱いされてるけど、正当な事をしただけ。男側に非があるから怖い女というレッテルを貼られてるだけ。

「っで？なんで俺はこんなところに誘惑されたの？」

「ふ〜ん……。誘惑されたって意識があるのに、彼女をおいて来たのね」

そう言うと加奈はちょっと大人びた顔を直哉に向け、四つん這いで話かける。
直哉だけじゃなく、男性みんな加奈にこんな風に言い寄られて来たらたまらないだろうな。

「ちょ、ちょっと！そういう言い方するなよ。しかも目のやりどころに困る！」

「見せてるのよ。じゃなきゃこんな格好で来ないでしょ」

こんな会話の連続。見せる為の服、見せる為の体、言わされる会話、消えていく理性・・・

「なんかここ暑いね」そう言って上を脱ぐ加奈。っと言ってもすでに室内に入って上着は脱いでいる。今脱いでるのは最後の一枚の露出の激しいワンピース。そう、下着姿になってしまった。

「はあ、楽ちん。直哉、見すぎだよ？」

「いや、この状態を見るなって方が難しいぜ？」っと言って触ろうとする直哉だったけど・・・

「いきなり触ろうとする？とりあえずシャワー浴びてきて、そのあとに女に浴びさせるのがマナーじゃない？」

「お、おう。そうだな。恋人って訳でもないしな。ちょっと浴びてくるよ」

シャワーを浴びた直哉と入れ違いで「タッチ」っと言って交代で入る加奈。もちろん体は見えないようなところで残りの下着を脱ぐ・・・

「やべー、加奈めっちゃエロいな。スタイルいいとは思ってたけど、あれは反則だな。完全リードされてる感があるけど、しょうがねーか」

そんな思いの直哉。

そしてシャワーを浴びて加奈が下着姿で現れる。

「ああ、気持ちよかった♪やっぱラブホテルのお風呂はきれいだし、いいねー」

「ちょっと加奈、流石におあずけ状態くらって結構きてるんだけど・・・」

「ふ～ん、な・に・が？」

「ちょっと勘弁してよ～、だってこの状況だよ？しかもそんな格好って・・・我慢できるわけないじゃん！」

そう言って加奈に覆いかぶさる直哉。両手を奪われる加奈。

「直哉私とHしたいんだねえ、でも私リードされるの嫌いだよ？したいなら手をどけて！リードするのはわ・た・し」

そう言われると、直哉は素直に手を放して逆に加奈に上に乗られ、主導権を握られる。加奈の「カワイイ」って声が聞こえてきそう。

バスローブからはだけた体を指でなぞる加奈。

「彼女が知ったらどうなるんだろうねえ。しかも女にリードされて興奮してる彼氏なんて」

「ちょ、そういう言い方するなよ～。え、マジじゃないよね？」

すでに布石は打たれてる。加奈の元彼の時点で男にとって加奈は「怖い女」なんだ。

「え～、私がそんな事するメリットってなあに？別に直哉の事奪いたいなんて思っていないよ？」

「え、いや・・・ユイと仲いいし、何か聞いているのかって思って・・・」

「へ～、ユイとなんかあったんだあ。どんな事あったのかなあ？」

直哉のしまった！っと言うような顔・・・。

加奈の怖さはこれだ。「言わされて」いる

「っで？ユイに何かしたの～？直哉、私がユイと親友って知ってるよね？」

「知ってるよ！ただ、手を出したとかじゃなくて……」

「じゃなくて……？」

責める加奈、耐えきれなくなった直哉。

「ああ！分かったよ！言っておくけど、お互い了承の元だからな！お互い初めてだったし、いざ初めての時に恥かきたくないから経験しておこうって話しになったんだよ！」

「ふ～ん・・・っで？ユイも了承したんだ？」鋭い目つきの加奈。

「いや、まあ。多少強引だったかもしれないけど。でも本当に嫌だったら二回もしないだろ？」

「へ～、一回だけじゃ飽き足らず二回ねえ。直哉が求められちゃったのかなあ？」続く鋭い視線。覚悟を決めた顔の直哉。

「ああ！俺だよ！二回目も確かに俺が求めたよ！でもユイだってしたくてしたはずだし、誰にも話してない所見ると別にまんざらでもなかった訳じゃん！？加奈にどうこう言われる話じゃないだろ！」

これをきっかけに加奈に覆いかぶさる直哉。また腕を捕まえる。

「それはユイの前でも言えるの？恋人いたけど、抱きたかったって。お前もまんざらじゃなかっただろって？」

続けて加奈が話す。

「ユイの性格知ってるよね？そんなユイの心を弄んだのは誰？恋人いることもその様子じゃあ隠してたみたいだね」

より鋭くなる加奈の眼。まさにそんな時だった。

「お前なんなんだよ！今男と二人でホテルに来てるんだぞ！どういう状況か分かってるのかよ！！」

直哉が何を思ったのか、無理矢理に加奈を襲いかかろうとした・・・

「こういう事されても文句言うなよ！加奈が誘ったんだからな！」

息が荒々しい直哉

冷たい目の加奈、「ふう・・・」っとため息をついて静かに語り始める

「直哉分かってないなあ。私が襲われる事わかってて、何にもしないでここに来たと思ってるの？」

チラッと視線を携帯の方に送る。何かが光ってる。携帯でムービーを撮ってる？違う。

それなら無理矢理削除してしまえばいいだけ。

じゃあなんなんだろう。

「見てきてもいいよ」

冷たい加奈、それを取りに向かう直哉。それを見た時・・・ものすごい光景が携帯の画面にあった。

加奈の元彼だ

「直哉君だっけ？大胆だねー、しかもカメラ通話入れっぱなしを気付かないほど興奮したの？まあ、加奈いい女だからなあ。」

顔が青ざめる・・・どういう事か検討がつかない。

だって加奈達は別れたはずだし、携帯で映像を見せる意味が分からない。こんなの脅しにもなんにもならない。

趣味？

いや、違う。加奈がそんな意味のないことするはずない。

加奈に助けの目線を送る

「ふふ、何が聞きたいのー？元彼と連絡を取ってる事？それともどういう状況かの説明？」

もちろん両方だ。

「まあ話は繋がるんだけど、彼はね、反省しているようだから私の協力者になってもらったの。って、何の協力かというところ・・・」

「もったいぶらないで言ってくれよ！」

「私の元彼の高校・・・誰と一緒にかな??」

そう、直哉の彼女は加奈の元彼と同じ学校だ。青ざめた直哉は携帯画面をもう一度見る。すると信じられない光景を見た

「え・・・嘘だろ、なんで真奈美がそこに映ってるんだよ」

「大丈夫だよ、まだ見てないはずだから」直哉の可愛い彼女は、私の元彼とその仲間達のイケメン君達と楽しくカラオケやってるだけだから」

続けてこう言う。

「真奈美ちゃんだっけ？名前はどうでもいいんだけどさー、こんな状況の直哉を見たらどう思うかな？」

「こんなの加奈達のはめただけじゃん！」

「そうだねえ」まるでそう言うのを分かっていたかのような加奈。

「じゃあ、彼達が一生懸命口説いて、何処かへ行っちゃったら彼女の問題だよね〜。彼女とその友達も結構いい感じにお酒入ってるんじゃないかなあ。」

「……………」

何も言えなくなった直哉。今すぐ叫びたいが、そう出来ない状況。

「ねえ直哉、大好きな人が他の男と一つの空間にいるってどういう気持ち？知らないままの方が幸せかなあ。彼女もユイとの関係知らないだもんねえ」

静かに着替え始める加奈。そのまま言葉を発する。

「何かをされる側の気持ちが分かった？更にそれを言えずに耐え忍ぶ女の気持ちはどんなんだと思う？」

冷たく言い続ける加奈に反して、直哉は無言のまま下を向いている…………

加奈は着替え終わった。

すべてが完全に仕組まれていた。どうあがいても直哉に逃げ場はなく、なす術は無かった。加奈はこの日の為にすべてを仕組んでいた。自分の身の安全も守りながら、直哉を追いつめる術を。

「あなたは誰かに何かを言える？そんな立場なのかなあ」

「そんなつもりじゃ……………」

言葉を遮って、加奈の声が響く！

「じゃあどんなつもりよ！ユイは直哉の都合のいい女じゃない！ユイがどんな思いで三カ月いたと思う！？」

呆然とする直哉。

「私は絶対許さないから。親友を、ユイを傷つけた事！ユイは私のように強くない。あなたはそれをもて遊んだ！」

きつく睨む加奈。目を背ける直哉。

「そうだな・・・加奈に言われて気付いたよ。俺は最低だ。ユイの初めてを奪って・・・」

「勘違いしないで！」

話しを中断させる加奈

「ユイの初めてを奪った事を傷つけたんじゃない・・・」

「体を傷つけたんじゃない！ユイの心を傷つけたの！」

思いっきりドアを閉めて出ていく加奈

何も言えず呆然と立ち尽くす直哉

その後、直哉はどうしたのかはわからない。

もしかしたら、すぐに彼女に電話していたのかもしれないし。

あわててホテルを一人で出て行ったのかもしれない。

あくまで加奈に聞いたここまでの部分しか分からないのが、直哉にとっては地獄のような一日だっただろう。

その日の夜、何があったかを加奈に聞いた。

聞いた直後は変な汗がどっと出た。

「まあ、言ったらユイ反対するからねー」

「そうだけど、無茶すぎるよ！そんな怖い事・・・私は別にいいのに」

「よくない！あいつはユイの人の良さに付け込んだの！そんなの絶対に許せない」

加奈・・・。すごい嬉しいよ。私こんなに素敵な親友に守られてる。

でもやりすぎだよ。

可笑しくて、その場の直哉を想像したら可愛そうとも思ったが、笑ってしまった。

「あの時の直哉の顔見せてあげたかったなあ」

「私、可愛そうで見れないよ」

加奈は「まだこんなのも用意してたんだけどな」と話をしていたが、私は怖くてそれ以上は聞けないと思った。

こんな復讐のような事がいいのかわからない。ただ、加奈の気持ちが凄い嬉しくてその日は遅くまで二人でお話しをした。

私・・・やっぱり幸せ者だよ。

加奈、ずっと親友でいてね。

白い紫陽花

【3】 白い紫陽花

私にも後輩ができて、もう二か月が経とうとしている。

井の頭線に乗ればアジサイも綺麗に咲いてる。私は白いガクアジサイが好き。なんだか可憐。

加奈には彼氏が出来て、直哉はまだあの彼女と付き合ってるみたい。

私は・・・好きになれる人がいない。

別に恐怖があるわけじゃないんだけど、そんな高校二年生になったた。

「先輩！」

「あ、健一君」

健一君は加奈が紹介してくれた後輩。加奈の部活の後輩なんだって。

なんでかわからなく

「たまには男っ気を出しなさい」って言われて無理矢理紹介されちゃった。

「来週の約束覚えてますか？」

「うん、吉祥寺に行くんだよね？覚えてるよ」

笑うとクシャっとした顔をする健一君。加奈が進めるだけあって、まじめで誠実な感じ。ちょっと子供っぽいかな。

「よかったー、僕忘れられてたらどうしようかと思ってたんですよ！」

「忘れてたとしても、どうせ他に予定なんて入らないから大丈夫だよ」

「またあ！ユイさん人気あるんですよ！俺デートするって自慢しちゃいましたもん」

ちょっと・・・デートって。でもそうなるのかあ。なんか弟みたいなんだよね。でもきっとそんなこと言ったら傷つけちゃうから、言わないでおこう。

「新宿から明大前で井の頭線乗換でいいよね？」

「はい！」

「うん、じゃあ新宿で待ち合わせね」

そう言ってその場を後にした。

井の頭線にはよくある紫陽花しかない。私は鎌倉の明月院が好き。たくさんの種類の紫陽花が咲いてるの。

紫の紫陽花

青の紫陽花

ピンクの紫陽花

そして好きな額紫陽花

額紫陽花は実はみんながよく知ってる紫陽花の原種

紫陽花の方が品種改良された方なの。なのに原種より、紫陽花の方が有名。

土のp h値や元の持つ色素で色が変わる事から「七色の花」とも言われてる。

そして・・・みんなが思ってる花の部分は実は花じゃない。

あれは「装飾花」引き寄せる為の「装飾花」

中にあるさえない粒のようなものが実は花。生殖機能がある「花」

額紫陽花ってまるで人みたいでしょ？

原種、人で言う猿より人間の方が知名度が高くて知能もあって

色を変える代わりに、人との出会いによってどんな人間にも変われる

中身を知ってもらう為に、外側を着飾って人を引き寄せる

まるで人みたい

そして紫陽花も毒を持ってる・・・

人と同じように・・・

【2】

約束に日。

「先輩！」

健一君が笑顔で待っててくれた。私も10分前に来てるんだけどなあ・・・

二人で電車に向かって歩いて、共通の話題の加奈の話ばかりをしていた。加奈は部活の先輩としてかなり尊敬を集めてるらしい。

「加奈さん凄いんですよ！まず男気が」

確かに情に深い加奈っぽいなあ。

「加奈に言っちゃうよ？」と言うと健一君は

「ダメですよ！怒られちゃいます」

と言ってあたふたしてる。普段私はみんなにいじられる方だから、いじる方はあまり経験した事がないから楽しい。みんなこんな気持ちで私をいじめてるんだなあ。うん、これははまりそう。

電車を乗り換えて吉祥寺方面に向かう途中、沢山の紫陽花が見えてきた。

「綺麗・・・」

見とれてると、健一君が

「紫陽花好きなんですか？」

「うん、綺麗じゃない？梅雨の時期に咲くって言うのも好き。雨に打たれて咲く花なんて、なんだか可憐でしょ？」

健一君はそのあと何も言わず一緒に紫陽花を見てくれた。興味あるのかな？でも男の子だもんね、お花なんか見てもつまらないよね。

目的地に着いて、色々な場所へとエスコートされた。どうやら健一君は吉祥寺が好きらしく、結構いろんな事を知ってる。私はそんなに知らないから、結構面白い。途中いろんな事を聞かれる。

。

「ユイさんって趣味なんですか？」

「好きな食べ物は？」

ありきたりな質問・・・その中で真剣な顔でひとつ。

「ユイさん・・・彼氏いないんですか？」

ああ、やっぱり聞かれちゃったかあ。うん、なんとなくは分かってたよ。聞かれるだろうなあって。

「今はいないよ。って言うか一年以上いないかな」

「え・・・そんなにですか？意外です」

「そんな事ないよ。私奥手だし、学校でも静かな方だし。加奈はすごいモテるけどね」

そう、加奈の話はよく聞くの。先輩に告白された、後輩に告白された、他校にナンパされた。加奈は容姿もスタイルもいい。それに加えて社交的。なんで私なんかを親友って言ってくれるんだろう？っと本当に考えてちゃう時があるもん。

「あの・・・」

「うん？どうしたの？」

「僕、ユイさんの事が好きです！」

「え・・・」

いくらなんでも急すぎるよ！って言うか、そういう流れだったのかな？
わかんないけど……。でもなんで加奈の話題から私の告白へ繋がるの？

「ダメですか・・・？」

「あ、ごめん！ちょっと急すぎて、考えられなかった・・・。びっくりしちゃって」

回答に困りながら、私は健一君への返事を考えていた。

「健一君...ごめん」

言葉が足りない。分かってる。今一生懸命考えてるの。

でも先にこの言葉がでちゃった・・・。

嫌いじゃないよ、でもまだ健一君の事何にも知らないし、健一君も私の事ほとんど知らない。お互い表面しか知らない。その事を言葉足らずで一生懸命に健一君に伝えた

「そうですよね・・・すみません。でも俺ユイさんの事好きなんです！このまま好きでいてもいいですか？」

「え、うん。嬉しいけど・・・。期待をもたせても悪いから・・・」

「そんな事ないです！」

勢いに負けちゃった。その日は承諾だけして、残りのデートを楽しんだ。健一君の明るい性格のおかげで、一日凄く楽しめた。うん、友達としては凄い好きだよ。でも恋人ってなると.....。

私はどこかで直哉との事を引きずってた。別に好きとかじゃなくて、初体験の事とか。

【3】

次の日。

「ユイ！昨日のデートどうだったあ？」

「楽しかったよ。健一君詳しかったから、色々連れて行ってもらった！」

「っで・・・どうなったの？」

何が？って顔をした私に加奈が突っ込む

「告られたでしょ？私相談されてたもん！デートの時思い切って告白しますって。ねえねえ、なんて言ったの～？」

私は加奈に一部始終を話した。

そしてそのまま相談じゃないけど・・・直哉との話をした。

私がもしこのまま、健一君じゃないにしても、だれかと付き合った時にキスをする。

Hもするだろうし。

でも私は1年以上も恋人がいないのに初体験じゃない。

その時相手はどんな反応をするんだろう。軽い女って思われるのかな。

きっと相手に嫌な思いさせちゃうよね。そんな悩みを加奈に話した。

「う～ん、そっかあ……。確かにユイにはつらい状況かもね」

うん・・・私は次に踏み出せない。恋愛が怖いとかじゃないと思う

きっと人と違う悩み。

私の責任だから、誰も責める事は出来ない。

「ユイのせいじゃないよ！直哉のせいだ。しょうがない、直哉をとっちめるか」

「ちょ、ちょっと！」 止めようとした時、加奈は私に冗談だよって言う。加奈の場合、冗談に聞こえないよ。

今週、また健一君に会って、ちゃんと話そう。私の過去の事も。だから男性を今は受け入れられないって正直に答えよう。じゃないと健一君の誠意に答えてないもんね

【4】

雨が続く毎日

ある日、私は健一君にだいたいの事情を話した。私はいま男性を受け入れられない。普通の人とは違う、自分の事情を。真っ直ぐな健一君に私から出来る唯一の事だと思ったから・・・

「そうだったんですね」

強い雨で言葉が聞き取りづらいけど、きっとそう言ったんだと思う

続けて健一君が言う

「って言うか・・・加奈さんこえー！やっぱあの人は敵に回したくないな～」

え？そこ？私の事・・・幻滅したのかな？まあ、そうだよ。でも知らないで、好意を持たれるよりはこの方がマシ。そう思った矢先.....

「って言うか、ユイさん気にしないで下さい！なんか・・・なんか悔しいですけど、でもそれって過去の事じゃないですか！しかもユイさんが悪い訳じゃないし。加奈さん復讐を果たしてるし」

「そうだけど・・・」

「関係ないです！ユイさんはやっぱり僕が思ってるユイさんでしたから！」

急に足元に傘を捨てて、私の肩を掴む健一君。雨に打たれながら真っ直ぐに私の眼を見て・・・

健一君は優しい。もしかしたら、恋の盲目にかかっているだけなのかもしれない。でも素直な気持ちでそう言ってくれてるだろうな・・・。

濡れてる彼を見て私は「ドラマみたい」って思いながら、「クスッ」って笑ってしまった。だってわざわざ傘を捨てて、私の肩を掴むんだもん。髪が濡れ、洋服が濡れ、顔に流れる雨。

私は健一君に言った。

「私はきっと紫陽花のような女なんだ。原種にもなれず・・・外見で勝手な評価を得て、周りのおかげでやっと色を出せてるの」

真剣に私の話を聞いてくれる彼。

「ただね、いざ食べたら毒があるんだよ。だから私は食べちゃダメ。見守って。梅雨が明けたら枯れるように、きっと健一君の眼からも私は色あせていくから」

そうやって私は彼の手を払って帰っていった。

「そんな事！」

彼の声が聞こえる・・・でも振り向かない。

だって今は彼にとって綺麗に見えるかもしれないけど、まだ私の近くを見てないもん。

ごめんね、キミの思いは受け取れません。

振り向かないようにして後にした私

なんでだろう？帰り道、涙が出てきた。
あんな真っ直ぐな人を傷つけたからかな？

でも、だって……。ごめんね、私は誰の思いもまだ受け取れないもん。

やっぱり私は引きずってるんだよね、きっと。

そんな状態でキミの思いは受け取れません。
ただ、キミには私の真実を伝えたかったのは本当だよ。だからこそ……。バイバイ。

私は色々と考えた……

人って振る側も振られる側も傷つくんだね。初めて知った。
こんなにも真剣に向かってきてくれる人の思いを答えられない時はつらいんだね。

あとで周りになんか言われちゃうかな。「あの女は冷たい」とか「高飛車」とか……。
それも怖いけど、でも後で彼を傷つける方がもっと嫌だ。

明日加奈に謝ろう。加奈からも言ってもらえるように。
私……。もう誰にも好かれたくない。好きにもなりたくない。恋愛が怖い。

誰の目にもとまらないように、静かにひっそり過ごそう。うん、そうしよう。そしたらきっと誰も傷つかないよね？

神様って意地悪だなあ。人間くらいだよ、こんな感情を持って生れてくるのって。エゴを持って生れて、そしてエゴですべてを傷つけて行く……

そろそろ梅雨も終わる。そしたらきっと、紫陽花も枯れて行くんだろうな。

私も一緒に静かにしよう。
誰の目にも止まらないような花になろう。

初めての本気の恋

【4】初めての本気の恋

直哉との一件があってから、1年以上が経って私も17歳
高校二年生の冬になった。

「ユイちゃん！」

「大木さん、お待たせしました」

大木さんは加奈の紹介で知り合った年上の人。

加奈の友達のお兄ちゃん。夏にみんなで海に遊びに行った時に知り合って、私が一人静かに遊んでるのを気にかけてくれて、仲良くなった。

月に一、二度みんなで遊ぶ仲。今日は初めて二人で外に遊びに行こうとのお誘い。

「もう、相変わらず他人行儀だなあ。そんなに俺の事嫌い？」

そうじゃないの。

どうしてもすべてから抜け出せない私はそんな感じの女になってしまっただけなの。

でも大木さんは凄い年上なせいか、すべて受け入れてくれるかのようにゆっくりと私に近づいて来てくれる。

「今日はねー、温泉に行こうと思って！」

「え？温泉ですか？」

「うん、箱根に日帰りで行けるいいところがあるんだ！完全に「和」って感じの」

温泉・・・あんまり行った事ないな。でものんびり出来そうだし、いいかも。

大木さんは23歳、車も持ってるし、仕事は土日休み。

仕事の事はよくわからないけど、それなりの企業に勤めるてるみたい。

そんな彼がなんで高校生の私なんかを誘ってくれるのかがわかんない。

きっと社会人同士とか、素敵な人がいそうなのに。

車で箱根に向かう途中で彼が話しかけてくる。

「ユイちゃん、色々あったんだって？」

加奈だな。もう、お喋りなんだから。

「加奈ですね。もう・・・帰ったら怒ろう」

「あ、違うんだ！俺がかなりしつこく聞いちゃったから、悪いのは俺。」

そう言いながら、続けて話す彼。

「なんか、ユイちゃんは他の子と違う感じがしたから、どうしても気になっちゃって、加奈ちゃんに無理矢理聞いちゃったんだよ。だから怒るなら俺を怒って」

「もう一年以上も前の話しなんで大丈夫ですよ。私はそんなに気にしてません」

「そっか・・・」

高速で車を箱根方面に向かう車内はなんだか空気が重くなった・・・。

「くくっ」

笑いをこらえるように笑う彼。私が？みたいな顔を見ると

「いや、ごめん。強がってるなあって思って。そうやって自分の中に押し殺して来たんだね」

「え・・・いや、別に・・・」

「もっと弱くなりなよ、強がるだけじゃ生きていけない。加奈ちゃんだっているでしょ。」

私には衝撃の言葉だった。

『弱くなりなよ』

そんな事言われた事ない。うん、強がってるのは分かってる。
実際強がってるし、そんな簡単に整理出来るほど大人じゃない。

「弱く・・・なりなよ、かぁ」

「え？気にさわった？」

「いえ、普通聞かないセリフだなんて思って。だって普通は「気にするなよ」とか「ゆっくり大人になって行くんだよ」って感じでしょう？」

「ああ・・・そうかもね」

うん。『弱くなりなよ』か...なんか心に残った。
心が軽くなった。

うん、少しだけ「弱くなろう」

【2】

ほどなくして温泉に着いた。

箱根湯本からもほど近い温泉で本当に「和」って感じ。

みんながくつろぐ所は畳で出来ていて、廊下や周りも昔ながらの木を綺麗にニスを塗ったような感じ。

小さく音も聞こえるけど・・・BGMなのかな？それがまた過去にタイムスリップしたみたい。

「ね？いいでしょ？」

「はい！凄い素敵・・・」

「こっちに来てごらん」

そう言って彼は奥の方へと案内してくれた。

また違う感じの空間につれてこられて、そこの目の前には溪流が流れていました

「わあ、素敵。小川の音まで聞こえる」

「うん、俺のお気に入りなんだ」

分かる気がする。だって凄い素敵だもん。

小さな音が凄い心地いい・・・

「まあ、ここにいてもいいんだけど、せっかくだから温泉に入ろうか」

そう言って彼に温泉の所まで連れて行って貰った。

脱衣所に入ってまた、びっくり！これって・・・全部露天風呂？？しかも岩を綺麗に敷き詰めて、本当に過去にタイムスリップしたみたい。

江戸の人ってこんな感じでお風呂に入ってたのかなあ。

数種類ある温泉の中でさっそく近くの温泉に入ってみた。

.....暑くて足も入れられない。

外の温泉なのに、こんなに暑いんだ。

「お嬢さん、熱いの苦手かい？」

優しくなおばあちゃんが話しかけてくれる。

「はい・・・お恥ずかしいですが・・・」

「ホホホ、礼儀正しい子だねえ。あっちのお湯は少しぬるめだから、入っておいで」

そう言われて、頭を深く下げてそっちのお湯へと浸かった。

なるほど、確かにこっちは丁度良い温度。

はあ...、気持ち良いなあ。

私はきっと何時間でもここにいられるな。

.....。

.....。

あ！いけない！絶対大木さん待ってる！

脱衣所の時計を見ると、もう1時間半も経ってる！！慌てて着替えて、合流の所に行くと、大木さんは外で煙草を吸っていた。

「くくく・・・ユイちゃん、慌てて出てきたでしょ」

またあの顔で笑って私を見る。

「すみません、すみません！すっかり時間忘れてて・・・。」

「果報と女の長湯は待ってね。いいから、髪をまず乾かしておいで」

あ、そうか！私急ぎすぎて髪も乾かしてない・・・
戻って急いで髪を乾かす私。
はあ、恥ずかしいなあ。

「お帰り、落ち着いたかな？」

また笑った顔で私を見る。

「はい」とだけ答えて、彼について行く私。

「お腹空いたでしょ？ここのご飯もなかなかだよ」

そう言って下の方降りて行く私と彼。

贅沢にその日はすき焼きをいただいてしまった。

お腹も心もいっぱい。
凄い充実しちゃったなあ。

「大木さん、今日はありがとうございました。お金も全部出してもらっちゃって・・・」
「ハハハ、気にしないで。俺もゆっくり出来たし。外で遊ぶより、実はこういう方が好きなんだよね」

そう言いながら車にエンジンをかける彼。
意外だな、私てっきりアウトドア派だと思ったのに。私も割とインドアだから嬉しいけど。

「この人意外とインドアだなんて顔してるよ」

「えっ？」

私って読まれやすいのかな？恥ずかしいなあ・・・。

車の帰り道、自然な揺れが凄い心地よくて、睡魔が襲ってくる・・・。
ああ、なんか会話しなきゃ・・・。
運転までしてくれてる大木さんに失礼だよな。

「温泉のあとにご飯を食べて、車は眠くなるよねえ」

「あ、すみません！ちょっとウトウトしてて・・・大丈夫ですから！」

高速の止まらない感じも、また眠気を誘ってくる。

そうすると、車はパーキングエリアの方へと向かって行く。「休憩かな？」って思いながら、車が止まるのを待っていたら大木さんが急に私の方を見る。

「え・・・」

ドキドキしてしまう私。

なんだろう？

大木さんがゆっくり私の目の前に来て、抱きつくのに限りなく近い距離になる

「あ・・・」

その時！シートを後ろへと倒された。

「こうでもしないとユイちゃん寝ないでしょ？俺を気にしてくれるのは嬉しいけど、寝なね」

なんだ.....シートを無理矢理倒す為にそうしたのか・・・。

なんか期待して損しちゃった。

——え？期待？

私期待してたの？

・・・

恥ずかしい・・・

寝れなくなった・・・

ドキドキする。

「大木さん！」

「うわっ、びっくりしたあ。どうしたの？」

「私、なんだか眠気がどっか行っちゃいました。お話しして下さい」

「う、うん。そうだね」

そう言ってまたお話をし始めてくれた。

レインボーブリッジも遠くに見えて、きっともうすぐ高速を降りる。
そしたらこの時間も終わりなんだね。

このままずっと走ってくれればいいのに。本気でそう思った。

「大木さん」

「ん？なに？」

「あの・・・私に弱くなれって言ったじゃないですか」

「うん、気に障っちゃった？」

「いえ、そうじゃないんです。ただ・・・どういう意味ですか？」

だいたい事は分かってる、私は強がってるからもっと弱くなれって事だもん。でもどういう意味なのか、彼から聞いたかった。

「う～ん・・・。俺の中で、弱くなれば、強くなれって意味なんだよね。」

え？まったく反対の言葉じゃ・・・どういう意味？

「みんな人間はそう、弱い人間もいれば、強い人間もいる。ただ、弱くなれって言うのは、自分の弱さを知ってそれを補う為に人に頼る強さ、しなやかさも身につけるって意味」

「人に頼るのは弱さじゃないの？」

「自分でしっかり分かって頼ればいいんだよ。それは弱さじゃなくて、自分を見つめて他人を利用して寄り添う強さ。人はそれをズルイというかもしれないけど、そうじゃない。ちゃんと分かってるから強いんだ。ズルイと言う奴はただの妬みだね」

不思議な事を言う人・・・私の叔父さんに似てるなあ。

叔父さんもよくこう言う事を言う。それが好きでよくお家に遊びに行ってたっけ。

「ユイちゃんはどうしたいの？」

唐突に聞かれ、何も用意していない私。

「きっと恋愛が怖いんじゃない。ただ弱さに逃げてるだけなんだよ。もっと自分を客観的に見て、弱さがあるなら他人に甘えて取り除けばいい」

そっか、他人に見せる弱みは弱さじゃないんだね。弱さを見せて自分を自分から守る事も必要なんだ……。それは強さなんだ。

「ありがとうございます」

「えっ？」

私は勝手にお礼を言って、自分の中で何かが綺麗に晴れた。

うん、そうなんだ。私は馬鹿だから気付かなかった。加奈が一生懸命友達を紹介してくれる事も、遊びに誘ってくれることも。

「私、大木さんを今日利用しちゃったんですね」

私は笑顔で彼を見た。照れながらも、満足そうな彼。

「うん、今日一番の顔だね」

彼のはにかんだ顔も素敵。

あと5分で家に着く……

もう少しこの人と色々なお話しがしたいな。

不思議な空気感と独特のミステリアス感

そっか……。もう12時になっちゃうんだね。

「今日は本当にありがとうございました」

帰り際に挨拶をする私。ホントに楽しかった。

でもそれだけじゃない。私にとってとても大事な時間だった。

「遅くなっちゃったけど・・・大丈夫かな？」

「はい、今日遅くなるってメールしてあるので大丈夫ですよ」

あまり遅くまで外出しない私だけに、たまにはって事でお母さんも承諾してくれていた。だって普段はいい子だもん。こんな時くらい許してもらわなきゃ。

「じゃあ・・・」

帰ろうと、ドアに手をかけた時。
彼が私の肩をつかんで、振り向かせる。

「・・・・・・・・！」

いきなりのキス・・・。
急な事に私も訳がわからなかったけど、ゆっくり顔が離れて行く彼の口が眩く

「ごめんね、急に・・・」

彼の言葉をさえぎって.....

「・・・・・・・・」

私からもキスをした。
少しびっくりする彼も、じょじょにさっきと同じ甘いキスへと変わっていく。

「おあいこです。なんてね。ちょっと利用してみただけですよ」

精一杯の言い訳。素直に言うなら、ただ私からもしたかった。
こんな事出来るような子じゃないのに。
でも全てを分かってるかのような彼の顔は優しく私を見ている

そして・・・もう一回見つめ直して唇を重ねる二人。
長いキス・・・

長くて甘いキス・・・

「順番が逆になっちゃったかな？」

彼の言葉に「え？」っと戸惑う私。

「ユイちゃん、付き合おう」

「・・・はい」

ちょっと涙目の私。この人のそばにいたい。

「この顔だと、お家に入れないので、もう少し側にいて下さい・・・」

そう言って抱きつく私。彼が頭を抱えてくれる。優しく、優しく・・・

やっと見つけた居場所

やっと見つけてくれた人

私、好きになってもいいよね

うん、好き

「好きです」

「うん、俺も好き」

言葉は言の葉

発する事で効力を得る

私の心は言葉によって満たされていった。

本気の恋～純愛～

【5】本気の恋～純愛～

あの出来事から早くも三カ月・・・

「最近どうなの？大木さんと会ってる？」

加奈の声。それは心配してるのではなく、私をからかいたいだけって事は分かってる。

「うん、週1、2回は会ってるよ」

むしろその1、2回の為に毎日過してるような感じ。その日の為に毎日がわくわくしてる。

「Hしたの？」

鋭い事聞くなぁ・・・流石は加奈。

実のところ、まだしてない。

きっと大木さんも私の事を気遣って、何もしてこないんだと思う。過去を知ってるから尚更。かと言って私からは何もできないし・・・

そんなこんなで三カ月が経っちゃった。

「ダメだよ、自分からも行かないと」

心配そうな顔をしている加奈。そうなんだけどね。でも私からって引かれそうで怖いよ。

「ユイの気持ち分かるよ、でも自分から少しは行動しないと大木さんだって何も出来ないと思うし・・・せめて「Hしよう」って直接は言えないにしても、たまにはゆっくり二人で居たいとかさあ」

真剣に話してくれる加奈。それも分かってる。でも...どうしてだろう。どうしてもその小さな勇気が出ないの。

「うん、勇気出して言ってみるね...」

今週末は車で出かけようって言ってたし。

うん、勇気だして言ってみよう。私だって彼と一つになりたく無い訳じゃないし。

【2】

彼はいつも家の近くまで車で来てくれる。

「お待たせ～」

「いつもありがとうね」

流石に三カ月の月日は敬語も少しずつなくなってフランクな関係になるには十分な期間だった。

「今日は何処行こうかなあって考えてたんだけど、何にも思いつかなかった。どうしようか？」

「恋人がマンネリ化するには丁度いい期間だもんね」

意地悪に話す私に対して、少しだけ焦った顔でこちらを見る彼。

「ちょ、ちょっと！そういう言い方しないでよ～」

ふふふ、そんな顔を見るのも私好きだよ。

うん、つまり...全部好き。

目的も無く、とりあえず車を走らせる。

「海の近くにでも」と言う安易な理由でお台場に向けて車を走らせた。

「・・・・・・・・」

どうしよう。何処かでゆっくりしようって言おう言おうって昨日練習したのに。

いざこの時になったら何にも言えない……。恥ずかしいんだもん。

「考え事？大丈夫？」

不安そうな顔で話しかける彼。

「ううん、大丈夫！なんでもないよ～」

ちょっと気まずい感じに……。加奈があんな事言うからだよ！もう……。どうしよう。こんな時相手の気持ちが見れたらいいのになぁ。

「なるほどね・・・加奈ちゃんになにか言われたな？」

「ククク」といつもの笑い癖で笑う彼。

「どうして!？」

びっくりしてしまって聞く私、何か聞いたのかな??

「当たったか。なんとなくだよ、そんな気がしてカマをかけたら当たった」

もう! そんな事しないでよ! って言うかそんな勘が鋭いのは大木さんだけだよ。普通の人はその分かんないんだから。

「はあ、なんでもバレちゃうんだね・・・」

「まあ、バレたついでに話してごらん？」

え? こんな何にもムードがない中で話せないよ。

だって「どっかで休もう」なんて流れる的に可笑しいでしょ?

「・・・・・・・・言えない」

下を向いて、ふさぎ込む私。だって・・・・・・・・言えないもん。

「分かった、じゃあちょっと向かう先を変えよう」

そう言って車はお台場方向から、別の所へ向かう。

って言っても、何処に向かっているのかは方向音痴の私にはわからない。

「ねえ、何処に向かっているの？」

「知りたい？」

そりゃ・・・・・・・・知りたいけど。別に一緒だったら何処でもいいけど。

「ユイ・・・・・・・・」

真剣な眼差しで私の名前を言う彼。

「なあに？」

「ちょっと二人でゆっくり話せる所に行こう。誰にも邪魔されない所」

そう言って車をパーキングに止めて、二人で降りる。

ここは？五反田？

来た事ないけど、何があるんだろう？

よく分からないから、ただただ付いて行く私。

もしかして・・・

ここってホテル街？だよな？間違いないよね？

だってなんかそんな感じの看板立ってるし、「休憩」とか「宿泊」とか。

何も言わずに私の手を握って、一つのホテルに入っていく。

パネルを押して、エレベーターへ。

どうしよう、凄いドキドキする。これって、そういう事だよな？

うわあ、恥ずかしい！下着・・・うん、今日はちゃんと上下揃ってる！ってそんな心配してる場合じゃな～い！

急展開についていけないよお！

「ちょっと無理矢理だったかな？でもまあたまにはゆっくり話しましたかったしね」

「うん、強引だけど・・・私もゆっくり話したかったの」

どうしよう・・・なんて会話していいか分からなくなってきちゃった。

「大木さん！」

「え？」

「私.....大木さん好きです。我慢してくれてるのも知ってます。でも・・・私も大木さんの側にいたい」

言いたい事を言った、なのになんでだろう・・・凄い涙が出てきた。ずっと言いたかったはずの

セリフなのに、言えたら体が震えて来た。

「ユイごめんな・・・ユイにそんな事言わせて。俺はいつでも良かったんだ、ゆっくり——ゆっくり二人の距離が縮まればって」

抱きしめてくれて、頭をなでてくれる彼。

この腕の中が好き。

全部を包んでくれる感じ・・・

私きっとこのままこの人の腕の中で・・・

彼の顔が近づく・・・泣いた顔、変じゃないかな？

涙を拭いてくれる彼の手・・・暖かい。

優しいキス・・・時間がふんわりする。

私・・・この人に抱かれない。

全部身を任せたい

全部を抱きしめて欲しい・・・

ゆっくりと、本当にゆっくりと服を脱がされていく。

「ユイ、無理しないでいいからね。ダメにあったら言って」

不安そうな顔で見つめる彼。

そっか、不安を与えてたのは私の方なんだ・・・

ギュッと抱きついて。

「そんなことない。大木さんだから・・・全部受け止めて欲しい」

下着姿まで脱がされる私・・・恥ずかしい。

「大木さん、私ばかりじゃ恥ずかしいよお」

何も言わずにゆっくり脱いでくれる彼

なんだかマジマジと見られてる気がする

「ユイ・・・凄い綺麗な体してるね」

そ、そんな所見ないで！確かに・・・確かに最近胸がまた大きくなって来たし、目線が痛いなあって思ったけど・・・

「あっ・・・」

下着も脱がされて、全身を触られる。ちょっと怖いけど・・・気持ちいい。体も、心も。

「ユイの裸、気持ちいいな。ずっと触っていたい」

「私も気持ちいい、もっと抱きしめて・・・」

どんどんエスカレートする二人、私も初めて男性の大事なところを触ってみた。

でも・・・どうしていいかわかんない。なんか熱いし・・・

そうしてる間にも彼の手がどんどん下へ進んでいく

「あっ・・・」

「ユイ・・・良かった、凄い濡れてる」

「ダメ・・・言わないで・・・」

触り方が凄い繊細。慣れてるなあって思ったのが正直嫉妬。

そうだよ、私が初めてじゃないんだもんね。

そりゃそうだろうけど・・・それにしても上手い気がする・・・。

「ダメッ！そんなに中に入れないでえ、アッ！」

彼の行動がエスカレートしていく。なんか、何も考えられない。

凄い・・・指だけでこんなに気持ち良くなれるんだね・・・

「ハア・・・ハア・・・アッ」

「ユイ、そろそろ入れるね.....」

「うん....、うん.....」

彼のものがゆっくり入ってくる。私の事を抱きしめながら。

「ユイ・・・」

「大木さん・・・アアッ！」

ゆっくりと入って来たはずの彼の物は、急激に激しくなってくる。

どんどん動きが激しくなるにつれ.....凄い・・・凄い気持ちいい！

こんなに気持ちよかったっけ。私の肩を背中に沿わせて掴み、抱きしめられながらどんどん激しくなっていく。

「こ、こんなの・・・」

「！！！！」

「・・・・・・・・」

凄かった・・・単純に凄かった・・・。

わあ～！幸せだよお。

「ユイ・・・」

そう言って顔を近づけてくる彼。優しくキスをされた

私からも抱きついてキス・・・

好き・・・

大好き！

「ずっと一緒にいて下さいね」

「もちろんだよ」

少し体が脱力してしまった私は、抱き合いながらゆっくり浅い眠りについてしまった。

はあ、こんなに幸せになれるならもっと早く結ばれてればよかった。

こんなに幸せになれるもんなんだね。

ずっと・・・

隣にいて欲しい。

【3】

「ユイ・・・ユイ・・・」

うん・・・？眠いよお・・・誰え？

「ユイ！」

ハッとして目が覚める。大木さん??

「ユイ！そろそろ準備して出ないと、家に帰るの遅くなっちゃうよ？」

・・・。

わあ！もうこんな時間！

何時間寝ちゃってたんだろう。慌ててシャワーを浴びて、ホテルを出る二人。
車のあるパーキングエリアに向かいながら、顔を合わせる二人は幸せそう。

「ユイ、可愛いかった」

笑顔で話しかける彼。

「え??」

「いや、寝顔がね。起こすの罪悪感だったもん。子供みたいに「むにゃむにゃ」って言うんだもん」

いやあ！そんな見ないでよ～。

「だって、居心地良かったんだもん」

その言葉に満足そうな彼の顔。

私にこんなに幸せでいいのかなあ。

幸せでいっぱいだよお！

車の中で他愛のない事を話しながら家に向かう二人。でもそれも幸せ。

赤信号になるたびにキスをして。
そんな嘘みたいな光景に顔がにやけちゃう。

「ユイ」

「なあに？」

「好き、ずっと一緒にいような」

「うん！ずっと一緒がいい」

このまま彼とずっと一緒に・・・
幸せな時間が続きますように。

素直にそう思ってた。
あの時までは……

本気の恋～激動～

【6】本気の恋～激動～

大木さんと付き合い始めてもう半年が経とうとしていた高校三年生の春。
新入生も入ってきて、私もとうとう最上級生。

「ユイ～！」

直哉の声。

時間は偉大だなって思った。

あれから私達二人はだんだん普通に帰って行って、今では普通の仲のいい友達に戻った

近くのマックは、私達にとってたまり場。

行けば誰かいるだろうと、みんな集まってくる。

まるで私達、子供の為の「お酒が飲めないBar」って所かな。

「ユイは進路相談どうする？」

「う～ん・・・決めてないんだよねえ」

直哉は大学に進学するらしい。まあ親の意向もあるみたいだけど、お金持ちの子供はそれなりに人とは違う悩みを抱えているみたい。

『期待』

その重圧はきっと他の人にはわからない事なんだろうなあ。私にもいまいちわからないし。

「いいよなあお前気楽で」

ちょっとムツとする私。

「気楽じゃありません！」

そんな話をしていると、横から声が聞こえてきた。

「あれ～、直哉君。懲りずにまたユイちゃんたぶらかしてんのかなあ？」

「ちょ、おい！孝之！」

孝之。

1年半前に加奈が直哉を懲らしめる為に協力してくれてた「加奈の元彼」あれから色々あったらしく、今では加奈とまた付き合ってる。

「ホント頼むよお！やっところまで元に戻れたんだからあ！」

「ハハハ、まあ自業自得だよな」

いつの間にか、みんな仲良し。加奈がよりを戻したって言うのもあるけど、ひよんな事からこの二人は凄いい仲が良くなった。男の子同士っていいなあ。

「もう！そういう話は私がない時にしてよね！」

二人は顔を合わせ、そして大笑いする。

「間違いない！」

声が揃う。もう、ホント仲いいんだから

「なあ、加奈はまだ？」孝之が私に問う。

「う～ん、もう部活終わる時間のはずだから、そろそろ来るんじゃないかな？」

何も待ち合わせしていないのに、勝手に来ると思ってるみんな。
それくらいここにいつも人が集まる。

何気ない会話

何気ない高校生活

最後の一年・・・

これからの激動なんて、夢にも思わなかった一年。

「おお、みんな来てるねえ」

加奈が来た。部活帰りのせいか、結構後ろに引き連れてる。

「あ、やっぱユイもいたかぁ・・・」

軽く後ろを見る加奈。その理由は簡単だった。

——ああ、健一君も来てるんだ。そうだよ、同じ部活だもんね。

「お久しぶりです」

軽く礼をする健一君。

「久しぶり」

軽く言葉を返す。

「そんなに堅い挨拶しないでよ～！お互い知ってるんだし」

「おっ？そうなんだ？」

直哉が口を挟む。

「直哉は口出さないで」加奈がキツめに言う。

どうやら健一君に「例の男」とばれたくないらしい。

「直哉・・・さんですか？」

しまった！というような顔の加奈。

確かにありきたりな名前だけど、どうやら彼に『例の男』と言うのを知らせるのには十分だったみたい。

あからさまに嫌な顔をする健一君。

嫌な空気になりそうな所を、さえぎって言葉を発する人が一人。

「ああ！もうめんどくせーな」

孝之だ！

「健一君だけ？おそらく君が想像している男はこの直哉だよ。だからどうした？」

声を荒げる孝之に加奈が抑えようとするが。

「大丈夫だから、ちょっと黙ってろ」と小さな声で話す。

「何処まで聞いたかわかんねーけど、直哉をはめた奴がいる。ここにいる加奈と俺だよ。普通に考えてどうだ？普通一緒にこうやって仲良く出来るか？」

「いえ・・・出来ないと思います」

「だろ？でも今はこうなんだよ。確かに過去には色々あった。それでもこうなれたのはお互いに罪を認めて、それを超えたからなんじゃねーの？」

孝之は大人だ。

このメンバーの中でも秀でて一人だけ精神年齢が高い。

そんな所に加奈も惚れてるんだと思う。

「過去にいつまでもとられるな。君も一人の男なら器を大きく持て。そしていつまでも過去にウジウジすんなよ！」

「孝之！言いすぎだよ！」

加奈が止める。

「あ、確かにウジウジって言うのは言いすぎた、わりい。」

自分の非をすぐに認めるのも彼のいいところだ。こんな彼だからこそ、直哉も心を許したんだろう。

「すみません、俺にはまだ分かりません。失礼します」

明らかに不機嫌な顔でこちらを見て、その場を離れる健一君。

「あ～あ・・・まだ子供には分かんねえか」

「いや、一歳しか離れてねえし」

直哉が突っ込んで笑う。

「いや実際ね・・・」

直哉が珍しく真面目な顔で語り始める。

「実際さあ、俺は孝之のおかげでユイとここまで戻れたと思う。普通に考えたら、こんな関係無理だし健一君の気持ちも分かるよ」

「そうなのか？」

「ああ。だって本気で好きになった人が、最低な目にあって・・・って自分で言うのもなんだけどさ。その後に時間が経ったとはいえ、一緒のこうやって馬鹿話を普通にしてって無理があるよ。」

「私も孝之のお陰だと思ってる。一人だけおっさんだもん」

大笑いをする私。それにつられてみんなも笑う。

「おい！おっさんって！」

「いやいや、ユイの言うとおりでだよ。悪く言ったらおっさんだろ。でもな、ホントそういう大人な所のお陰で俺達は一緒にいられてるんだ。本当に感謝してるんだぜ？」

「うん、私も。孝之のお陰。こうやっていられてる事に凄い感謝してる」

実際そうだもん。孝之がいてくれたおかげで、私達はみんな一緒にいられる。客観的に見てくれて、凄い大人な発言で私達を導いてくれて。

「ちょ、ちょっと！どうした急に！なんもやんねーぞ！」

みんなで爆笑、そんな所も孝之のいいところだよな。

「まあ、私の彼氏だからねー、それくらいの器がないとー」

「お前どんだけ上から目線なんだよ！」

カップルの漫才が始まった。

うん、この二人やっぱりお似合い。よりが戻って良かったなあって思う。

「さてと・・・」

直哉が立ち上がる

「そろそろ大木さん仕事終わるっしょ。俺はここら辺で退散しようかな」

「直哉あ、大木さんはそんな器の男じゃねーぞ？」

「いや、分かってるけどさ。それでもマナーとしてね。俺はまだまだガキだから、逆の立場だったら、そんな男と毎回仲良く話してるって知ったら嫌だなって思ったからさ」

例の一件以来、直哉の口癖で「逆の立場だったら」って言うようになった。

うん、直哉だけじゃない。私も。

それくらい深い言葉だったから。逆の立場だったら。それを常に考えたら、きっと人に優しくなれるもんね。

「直哉、今日ユウジ来ないって。さっきメールがあって、残業みたい」

私はいつしか、彼の事を下の名前で「ユウジ」と呼ぶようになってた。もう半年だもんね。

「おお、そうなんだ。まあそれにしても帰るよ。最近ここに居すぎて、うちの母親が「ご飯家で食べる」ってうるさいんだよ」

まあお坊ちゃんだしね、色々本当に大変そうだ。

「じゃあ私も一緒に帰るよ！」

ちょっと空気を読んでみた。加奈だって毎回みんなと一緒によりは、孝之と二人でいたい時もあるって思ったから。

「ユイ～、変な空気読むなよ」

「まあ、たまには二人で・・・ね」

そう言って二人で店を後にした。

【2】

帰り道はどうしても進路の話になる。どうやら直哉は専門に行きたいらしい。

ITを勉強して、お父さんの後を追いたいみたい。

でも母親は「あんな不規則な仕事ダメよ！」と言うらしい。

サーバーが落ちたりなんかすると、夜中でも出動しなければいけないらしい。どんな仕事も大変だと思った。

「ユイ全く決めてないの？」

「うん・・・やばいよね」

そんな話をしていると、目の前に見た事がある人が静かに近づいてくる。

「ユイさん・・・」

健一君だ。

「ちょ、お前！いくらなんでもさっきのすぐ後に現れるって！流石にストーカーじみてるぞ！」

「直哉！そういう言い方しないで！ごめんね健一君、まだ直哉は子供だから。孝之みたいに冷静じゃないの」

そう言って話かけると、健一君は静かに私に話しかける。

「ユイさん、今恋人がいるって聞きました。それなのに、過去に何かあった人と二人でいるなんて可笑しいと思います」

「え・・・うん。そうだね。でもね・・・」

言葉はさえぎられる。

「今に恋人に対して失礼だと思います。ユイさんはちゃんとした人だと思いました」

「ちょっと待てよ！」

直哉が声を荒げる。

「俺が言うのもなんだけどな、お前にユイの何が分かるんだよ！お前の事だって真剣に悩んでたんだぞ！勝手にユイを想像して決めつけんな！」

「確かに僕にはユイさんの事はわかりません。ただ人としてって話です」

「お前なあ！」

胸ぐらを掴む直哉。その動作を見て「ちょっと待って！」と声をかけて、私が変わりに声を発した。

「健一君、私そういう女だよ。そう思って貰っていい。私を美化しすぎだよ？私はそういう女、だからもうほっといてくれない？」

「本当のユイさんはそんな・・・」

健一君が自ら否定をしようとする

「私ね、子供は苦手なの。とくにキミみたいなね。だから、あんまり迷惑かけないでくれる？」

精一杯の嫌な女を演じる。じゃないと収まりがつかない気がしてきた。

私がいけないんだよね、私が彼の心を傷つけた。

だから言ったでしょ。私は紫陽花のような女だって。

こうなるなら、初めから私なんて見ないで欲しかった。

好きでいられるくらいなら、嫌われた方がいいんだよね？

うん、一生懸命嫌われよう。

嫌われた方がきっと全てが上手く行く。

彼の為に、彼に対しては嫌な女になろう。

それがきっといいんだよね

【3】

後日、みんなで集まったときに一部始終を話した。

「うげ～、もうそれってストーカーじゃん」

加奈がいやそうな顔で話す。

「これから普通に接するのが難しいなあ、いくら後輩とはいえ」

「そう言わないで、加奈だけでも優しくしてあげて」

「お人よしだな、ユイは」

直哉が話す。

そんな会話をしてる間に、一人納得がいかないような顔をしている。

孝之だ。

「納得いかねえ」

「え？」

みんな顔をそろえて、孝之の方を見る。

「俺は納得いかねえなあ」

「いや、そりゃみんな納得はいかないけど、健一君が大人になるまで・・・」

「そうじゃねえ！」

大きな声を出す孝之。

「ユイ！なんであいつにそんな事言った？わざと嫌われるような事を」

「いや、だって・・・」

「だってじゃねえ！いいかユイ、わざと嫌われて、自分から離れて貰おうなんてズルイ人間がすることだ。直接大事な事は言わない、説明がめんどうだから。そんなの優しさでもなんでもねえんだよ！」

「そ、そんなつもりじゃあ・・・」

「ちょっと孝之、言いすぎだよ！？」

「そうだぜ孝之、まるでユイが悪いみてーじゃねえか」

この声に周りがザワザワし始める。

静かに立ち上がる孝之。

「わりい、声あげちまって。でもな、ユイ。これだけは聞いてくれ」

「うん・・・」

「人と人が何か繋がっている時は絶対に誰かが傷つくんだ。友情でも恋愛でも。それを逃げたらお終いだ。何も成り立たなくなる」

「うん」

「どうしても絶対に誰かが傷つくんだ、自分が傷つく事を逃げたら相手に失礼だろ？全部含めて健一ってやつはユイを好きになったんだ。だったら、その思いもちゃんと伝えるべきだ」

うん・・・そうだね。

確かに私は自分が色々言われるのが嫌で逃げてた。

目に見える所で嫌われて行く事が怖くて、だったら一気に嫌われて視界から消えてしまった方が楽だって・・・。

「ってか、最近の奴はみんなそうだよなー！言うのが怖くて音信不通決め込んで、自然消滅狙ったり、わざと嫌われるような事して、相手から別れ話切りださせたりよー」

「浮気して隠してるやつもどうかと思うけどね」

厳しい加奈の突っ込みが炸裂した。

「ちょ、ちょっと！」

直哉と孝之が顔を合わせる。

「間違いない！」

また声が合う。

一気に雰囲気明るくなった。

うん、基本的に直哉と孝之は暗いのが苦手だもんね。
でもそのお陰でいつも救われてるよ。

うん、逃げたらダメ。好きになってくれた健一君に失礼だ。

【4】

週末のドライブ、裕次とのデートは定番になってきた。

「あのね」

「うん？どうした？」

「この前、みんなに怒られちゃった」

事情を説明した。裕次は「ククク」と笑う。

「笑いごとじゃないんだよー？」

「いやあ、悪い悪い。ただ孝之っぽいなって思ってね」

「まあ、そうなんだけど・・・」

色々考えてたのに、笑って終わりなんて。

「まあそれはユイが悪いよ。確かにその子に失礼だね。逃げたらダメだよ」

「うん、いっばい孝之に言われたから分かってる」

「っで、どうしたいの？」

どうしたいって.....答えは出てる。

直接、健一君に言って話そうと思ってる。

ただ...彼氏として、そういう子と直接会うのはやっぱり嫌かな？とか考えると、言いだしづらい。

「ちゃんと話ししてあげたら？」

もじもじしてる私を見かねて、裕次の方から話して来た。

「え？」

また心読まれてる？そう思ってしまったけど、どうやらそうじゃないみたい。

「いや、むしろ直接話そうって思ってるんでしょ？だから俺に話したんでしょ？」

「え、あ・・・うん」

ダメだ、この人には敵わないな。

「うん、そうしな。それがユイっぽいよ」

理解してくれる事が嬉しい。やっぱり好き。大好き。

「それにしても・・・」

「え？」

裕次が話し始める。

「いや、なんか妬けるなって思ってさ」

「え、健一君？」

「違うよ、ユイの友達。孝之もそうだし、直哉も。みんなユイの味方。しかも考え方に至っては、孝之は俺と似てるし」

うん、そうなんだよね。孝之は絶対おっさんだもん。

「まあ、近いからしょうがないけど、最初に相談って言うか・・・ユイに説教してくれるのが、第一にあいつらなんだよなあ」

なんだか寂しそうな目・・・

そんな事言わないでよ。

だって・・・

こんなことで裕次に迷惑かけたくないんだもん。
仕事だってしてるのに。
こんな高校生の悩みなんかで時間取らせたくない・・・

「今度健一君と話してくる！一番に裕次に報告するね！」

「分かった」と言いながらも、なんだか変な空気。

この頃からだ。歯車が狂ってきたのは。

【5】

「健一君！」

「ユイさん、お疲れ様です」

私達は待ち合わせをして、落ち合う事になった。会ってくれるか不安だったけど、この日はなんとか会ってくれた。

「話したい事ってなんですか？」

「あのね・・・」

精一杯、私から話せる事を話した。

今のみんなと一緒にいる経緯
今はかけがえのない友達だと言う事
今の恋人の話・・・

静かに聞いてくれる健一君。
少し間が空いて、口を開く。

「桜・・・綺麗ですよ。」

「え、あ・・・、うん」

「前にお話しした時は紫陽花が咲いてましたよね。今は桜です。ほんの2カ月の期間しか咲かないのに。すぐに雨が降り注いで今度は違う花が咲くんですよ。また紫陽花が...」

どうしたんだろう？私・・・やっぱりちゃんと伝えられてないのかな。

「僕の心境です。せっかく呼び出して貰って。桜のような気分でした。僕にはすぐに雨が降り注ぐ・・・」

「あ・・・」

そっか、結局私は傷つけてしまったんだ。

そう気付いたら、ちょっぴり切なくなってしまった。誰かが傷つく事はしょうがない。孝之に教えてもらったのに、また逃げたくなる私がいる。

「ユイさん」

「え、はい」

「みなさんに謝っておいて貰っていいですか？僕・・・まだまだ子供でした」

「そんな事.....そんな事ないよ。私がちゃんと話しをしなかったから・・・」

「そんな事ないです。そして、僕気付きました。やっぱり今でもユイさんが好きなんです。でも、ちゃんと諦めますから、一つだけお願いしていいですか？」

そう言って彼は真剣な目で私を見てる。

うん、私なんかに出来る事だったらなんでも。

「少しでいいんです。軽く抱きしめて、僕の頭をなでて下さい・・・」

「え・・・」

少しだけ時間が止まった。

健一君もつらいんだよね。せめて何かにすがりたいんだよね。

私がそうするだけで、彼の気持ちが整理つくなら・・・

「ごめんね、つらい思いさせてしまって・・・」

彼をそっと抱きしめて頭を撫でた。弟に頭を撫でるような感覚で・・・

「フフ・・・やっぱり思った通りの人だなあ・・・」

風が強い・・・

風に言葉がかき消されそうになる。

でもはっきりと聞こえたセリフ。

何か恐怖心を感じた私は、慌てて彼から離れた。

その時・・・

目の前の桜の花びらが不可解な動きを見せる。

人が通った後を、後ろから追うように。

「置いていかないで」

そう言うように、花びらが背中を追う。

その瞬間。

私はキスをされた。

私の所の花びらは動いていない。動いているのは、彼の周囲の花びらだ。

夕暮れから夜にほど近い軽くライトアップされた桜の木の下。

ここだけ時間が止まった。

「ちょ、ちょっと！何してるの？」

慌てて離れる私。

その言葉に反応して、彼が口を開く。

「ふふ・・・、大人になって言ってるのはユイさんだけじゃないですよ」

そう言って彼は言葉が続ける。

「僕だってこの一年間、ある程度成長しました。ユイさんを忘れる為に、色んな女性とお付き合いしました。」

確かに彼はいい男だと思う。ルックスもレベルが高い。

それに輪をかけて、軽いミステリアスな雰囲気が出始めていて、この一年間の何かを物語っている

何かが動き始めている・・・

サクラのライトアップが強くなっていく。

「そ、そんな・・・。忘れる為って、その人達に失礼だよ！」

「何かの時間を忘れる為にはそれが一番いいんですよ、僕は女の人を時間を忘れる為の利用出来る道具くらいにしか思わなかった」

見たことのない冷たい目。

知っている彼はもっと天真爛漫で、みんなに好かれそうな感じの可愛い年下と言うイメージ。

でも今の見た目からも、全く想像できない。

「ユイさんが僕を変えたとは言いませんよ。でも、ユイさんのお陰で、新しい自分が見つけれ
たんです」

続けて彼が言う。

「そしてユイさんも変わっていた。ならもう猫を被る必要もないかな？って。ただ純粋に成長し
た自分をユイさんに見せる事が出来ます」

私の頭は一気に混乱した。どういう事なんだろう？

意味がわからない。こんな時加奈の頭の回転が羨ましいと思った。

「ど、どういう意味？」

彼は冷たい目で私を見ながら、軽くほほ笑む

「簡単ですよ。本当に欲しいものは、奪えばいいんです」

風が強い・・・

花びらが渦を巻く。

ライトアップはすでに桜の為だけに存在している。

「わ、私帰る！！」

「いいんですか？」

え・・・どういう事？

「加奈さんがこの事実知ったらどう思いますかね、好きでもない男とキスをしたと」

「そ、そんなの健一君が勝手にしたんでしょ！」

「世間はそうは思わない」

どういう事？だって、事実そうじゃない。

「無理矢理されたから、しょうがない。でも世間の目は結構冷たくて、『隙があったんじゃないの？』と思いますよ」

「そ、そんなの！」

ただの言葉の応酬だ。戯言に過ぎない。加奈達だって分かってくれる！

「僕はユイさんに隙があったからキスしたんですよ。一年前の待ってるだけの僕じゃない」

そう言って、不気味な笑みで帰ろうとした私に近づいてくる。
少し睨みながら私は言った。

「そんなの最低だよ！」

その瞬間、頭が後ろから前へとグラッと揺れる

「・・・！！」

思いっきり強引なキスをされた。
慌てて彼を突き飛ばす・・・

「フフフ・・・」

彼が不可思議な笑い方をする。私に目線で軽い合図を送る彼。
その目線の先には・・・

信じられない・・・
サクラの花びらの向こうには。

加奈と直哉がいた・・・

【5】

「え？どういう事？」

「こういう事ですよ。この時間に二人に来て貰うように言ったんです。もしかしたら、喧嘩をするかもしれない、僕一人じゃ不安なので近くで見て下さいって」

不気味な笑い方をする彼。

「悲しい顔で言ったら、二人とも同情してくれて快諾してくれましたよ」

何処から？何処から見てたの？キスをされた所？

でも・・・きっと分かってくれるよね？

だって、彼から急にしてきたんだし。

「ユイさん・・・ユイさんは、僕を抱きしめてくれた。そして撫でてくれた。その後に僕からのキスは、客観的に見てどうなんですかね？まるで恋人のような・・・」

「ふざけないでよ！」

私は人生で初めて人にビンタをした。

それくらい許せなかった。頭が熱でいっぱいになる、怒りが堪えられない。

「ダメですよ、ユイさん。まるで浮気現場を見られた事を知ってしまったから、慌てて僕を殴ったみたいですよ」

「ククク・・・」っと不気味な笑いが続く。

そんな・・・全部そういうつもりでこうしたの？

熱くなった頭と心は、急激に冷めて行く。

加奈と直哉はまるで見てはいけないものを見てしまったような顔・・・

二人とも、そんな目で見ないでよ。

急いで私は二人の所に駆け寄った。

「違うよ、加奈！直哉！」

話を聞いて貰おうとする

「いや、ユイ・・・ちょっと俺分かんないから帰るわ・・・」

そう言って直哉は足早に帰ってしまった。

加奈は冷静さを取り戻したかのように私を見る。

「ユイ・・・」

後ろを振り向くと、健一君はもういない。

まるで私と打ち合わせしたかのように姿をくらませる。

加奈に一生懸命事情を話した。

何処から見ていたかなんて関係ない！

全部説明して、とにかく誤解を解きたい！！

「ユイ、とりあえず近くのカフェに入ろう」

うん・・・

春とはいえ、夜は寒い・・・

ゆっくり話すには桜の下は寒すぎる。

ライトを浴びて、ひらひら舞う花びらは私を馬鹿にしているようにしか見えないうらい優雅に舞っている。

「加奈・・・」

こうなった経緯も、健一君の変貌についても全てを話した。

「うん・・・話したい事は分かったよ。大丈夫、私は信じてるから」

加奈は健一君に対して、少なからず一年前から何か変わって来ているのを感じてはいたみたいで、なんとなく納得はしてくれていた。

「でもね、ユイ・・・」

加奈が怖い顔で私を見る。

「ユイもいけないよ、健一君の言う通り隙があるって言われてもしょうがないよ」

うん、確かに私があんな事しなければ良かっただけの事。

そして、もっと気を張っていれば、キスされる前に回避することが出来たと思う。

「はい・・・ごめんなさい」

「もう・・・馬鹿なんだから！」

涙がうっすら出てくる。

自分の情けなさに顔がゆがむ。

「もう、そんな顔しないの！明日私からも直哉に説明するから、一緒に誤解を解こう？」

「うん・・・」

加奈にはいつも甘えてる・・・

これ以上甘えられない。

涙を堪えて私は立ち上がり、加奈と一緒に店を後にする。

一緒にの帰り道・・・どうしても顔が醜く歪んでしまう。

加奈との分かれ道を前に話しかけてくる。

「ユイ、また明日ね？」

「うん・・・ありがと・・・」

そう言うと、加奈は別れる前に急に私を抱きしめてくれた。

強く・・・強く・・・

抱きしめられながら耳元で加奈が言う。

「強がらないの！ユイは一人じゃないでしょ？私はいつもそばに付いてるから！」

「うん・・・うん・・・」

加奈あ・・・どうしてそんなに優しいの？

ダメ・・・我慢してた涙が溢れてくる
涙が止まらない。

「加奈・・・加奈あ・・・ごめんなさい！ごめんなさい！！」

一気に涙が溢れてくる。全ての感情が私を覆ってくる。

「謝らなくてもいいの・・・ね？」

うん、うん・・・でもダメなの！
いつも私の側にいてくれて、いつも私がバカな事して叱られて。
それでも、それでも側にいてくれて。

「私ね、もっとしっかりするから！加奈に嫌われないようにもっともっとちゃんとするから！だから見捨てないで！」

「馬鹿・・・！そんな訳ないでしょ！私達親友だよ」

私の感情を止めていた何かが切れた。
大声で泣きじゃくる。

「かなあ・・・うわああん！！ごめんなさい！ごめんなさい！！」

泣きじゃくる私に、何も言わずに頭を撫でてくれる加奈。

時折「うん・・・うん・・・」っとだけ言ってくれてギュッと強く抱きしめてくれる。

私もう誰にも迷惑かけたくない・・・
加奈に迷惑かけたくない・・・

お願い・・・ずっと側にいて下さい。